

「最後に伝えておくべきこと」

ローマ16章17節—27節

17 さて兄弟たちよ。あなたがたに勧告する。あなたがたが学んだ教にそむいて分裂を引き起し、つまずきを与える人々を警戒し、かつ彼らから遠ざかるがよい。18 なぜなら、こうした人々は、わたしたちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞とをもって、純朴な人々の心を欺く者どもだからである。19 あなたがたの従順は、すべての人々の耳に達しており、それをあなたがたのために喜んでいいる。しかし、わたしの願うところは、あなたがたが善にさとく、悪には、うとくあってほしいことである。20 平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。どうか、わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように（ローマ16章17節—20節）

明治維新の志士に坂本竜馬という人がいますが、19歳になった彼が生れ故郷の土佐、現在の高知県を離れて江戸に剣術修行に行く時に彼の父、坂本八平（はっぺい）は3つの心得というものを手紙に託して竜馬に手渡しました。

1 修行が第一の本分であることを忘れるな。2 剣術の道具ばかりに心を奪われるな。3 色情に溺れて国家の大事を忘れるな。まだ一人前ではない我が子の旅立ちにあたり、言いたいことはたくさんあったことでしょう。しかし、竜馬の父はその想いを三つにまとめました。そこには初めて親元を離れていく我が子を思う親心がありました。

私達はこれまでローマ書を見てきました。この手紙はローマの教会に属している者達に対してパウロが書いた手紙なのですが、彼はその中で弱い者達への労わりや配慮について書いていることを私達は見てきました。しかし、いよいよその手紙の終わりにきた時に彼は、最後にどうしてもつけ加えておかなければならないこととして、読者が注意すべきことを書いて手紙を終えようとしているのです。

パウロは教会が「受け入れるべき人達」と「警戒すべき人達」というものを見極めていたようです。これまでこのローマ書から見てきましたように、パウロは「人間の弱さ」ということについて、驚くべき忍耐と寛容をもって受け入れていました。しかし、そのような人達以外に、ある人達によって教会が分裂してしまう、その人達の横暴によって教会に来ている人達が傷つき倒れてしまう、そんな人達に対しては警戒するようにとここで勧めているのです。

そして、おそらく、その彼の警告は彼の経験に基づいているものでありまして、実際にこれら警戒すべき人達によって、彼が開拓した教会がダメージと痛みを受

2018年6月3日 「最後に伝えておくべきこと」

けなければならなかったことが多々、あったのではないかということが彼の他の手紙の中にうかがい知ることができるのです。

彼らは教会がイエス・キリストを主としている者達の集まりであるにもかかわらず、その主に仕えることなく自分の腹に仕えている人達なのだとパウロはここで言っているのです。この「自分の腹に仕える」ということを英語の聖書は

「Serving their own appetites」と書いています。すなわち、彼らは自分の欲を満たすために教会に来ており、純粋にイエス様を求め、イエス様と共に生きようとしている人達を欺いているというのです。

人を福音から引き離し、キリストから引き離し、不和やつまずきをもたらす言動は、明らかにそれと分かるような形で近づいてくるわけではありません。あのエデンの園において、蛇は女に言ったのです「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」（創世記3章5節）。蛇のこの甘い言葉により人類は罪というものを背負って歩み出しました。

竜馬の父、八平ではありませんが、私は我が子が小さいころ、知らない人には決してついて行ってはいけないと教えました。言うまでもなく、幼子を狙った犯罪は今日、毎日のようにどこかで起きています。時々、携帯電話が鳴ることがあります。何事かと思えば、たった今、誘拐があり、このナンバープレート、この車種の車を見かけたら連絡するようにという知らせです。

このような環境に暮らす私達ですから、「連れて行かれたら大変なことになる、父さん、母さんにも会えなくなるぞ」と脅しのようになってしまいますが、そのことがどんなに危険なことなのかを彼らに話します。そして、確認のためにこう尋ねます。「もし知らないオジサンがやってきて、ディズニープリンセスの人形をあげるから、車に乗りなよと聞かれたらどうする?」。子供は少し悩み、そして言います。「いやだ、行かないと言う」。私は言います。「そう、それでいい」

別の子に「もし知らないオジサンがやってきて、アイスクリームをあげるから車に乗りなよと言われたら、どうする」。「うーん、うーん、ついて行く!」。そこから私は再度、繰り返し、繰り返し、知らない人の車には絶対についていけないということを教えます。子ども達にこのような人達を警戒するように教えます。

本心を言えば、そんなことは言いたくはないのです。「人を疑え」と言っているのですから。しかし、残念ながら、それでも言わなければならない現状が私達が暮らすこの世界にはあります。親として彼らを愛しておりますから、彼らを悪しき者達から守らなければならないのです。

2018年6月3日 「最後に伝えておくべきこと」

パウロもこのローマ書を閉じるにあたり、このことは最後に伝えておかなければならないと、愛する教会に「甘い言葉と美辞をもって、純朴な人々の心を欺く者達を警戒しなさい」と書いているのです。

そして、このパウロの言葉は当時のローマの教会だけに対する警告ではなく、今日の教会にも、私達一人一人に対しても、このパウロの言葉は同じ警戒をうながしているのです。私達は聖書の言葉と共に成長し、その聖書の言葉が多くの方達に伝わることを願います。そして、同時にそのために教会を守ることも必要なのです。

イエス様は「私は罪人を招くためにこの世界に来た」（マタイ9章13節）と語っています。すなわち、教会はあらゆる人に開かれています。しかし、その中で教会を自分の欲を満たすために利用する者や、そのためにそこに集っている人達が躓き痛みつけられるのであるならば、その時に私達にはすべきことがあるとパウロはここで言っているのです。

さらに、この箇所においてパウロは20節にこう書いています「平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。どうか、わたしたちの主イエスの恵が、あなたがたと共にあるように」。

私達の間起きてくる多くの戦いというのは、ひいてはサタンとの戦いであるとパウロはここで言っています。また、彼はエペソ6章12節-13節などにおいてもこう書いています。「わたしたちの戦いは血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、闇の夜の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」。

新約聖書には悪魔という言葉が37回、サタンという言葉が36回出てきます。その称号はここにも書かれている「闇の夜の主権者」であり、また「敵対者」「敵」「悪い者」「この世の君」「誘惑者」「竜」「蛇」「吼えたける獅子」などであり、この悪魔について、その気持ちを代弁するとこのようなこととなります。

我々、サタンは君達を告発することが大好きだ。隣人同士が互いに悪い噂話をするように仕向けるのが大好きだ。これほど愉快なことはない。我々は人々に神を疑わせたい。神はすばらしいお方ではない、自分になど気にかけてもないと信じさせることが大好きだ。人間には自分こそが神であることを信じて欲しいのだ。我々は神がお前達を愛していることを本当によく知っているから、お前達の心に神に対する疑いと無関心を植えつけることができるならば、これほど嬉しいことはない。

2018年6月3日「最後に伝えておくべきこと」

しかし、神は我々の戦略を滅茶苦茶にってしまった。神はユダヤ人と呼ばれる一つの民族を選ばれた。我々はその始祖であるアブラハムの時代から、このイスラエルという国をなきものにしようとしてきた。我々は何千年も前から、このことに力を注いできた。しかし、我々が一時、滅茶苦茶にしたものを、神はいつもまた元通りにしてしまうのだ。我々が表面的に勝利を得たように見えることもあったが、やはり我々は完全な勝利を得ることができないで今日にいたっている。

なにより決定的なことは神の一人子イエスが十字架にかけられることによって、完全な勝利をとってしまったことだ。確かにキリストが十字架にかけられた時に、我々は喜んだ。でも、それは創世記に記されていたことの成就だったのだ。「わたしは恨みをおく、お前のすえと女のすえとの間に。彼はお前のかしらを砕き、お前は彼のかかとを砕くであろう」（創世記3章15節）。

我々は確かに十字架によってキリストのかかとを砕いた。しかし、かかとは神の致命傷にはならなかった。なぜなら、このキリストは死んでよみがえってしまったからだ。さらには人の問題の根源である罪の赦しと共に、死という絶望に対して永遠の命を与えてしまった。このことは我々にとっては致命的なものとなっている。そうだ、それは我々の戦略を完全に無力なものとしたからだ。

さらにはかの創世記が言うように、死んでよみがえられ、神の右に座しておられるキリストは最後の日には我らの頭を砕くだろう。この日が来ることを我々は重々、承知している。ヨハネの黙示録には我々の最期が生々しく描かれており、我々もそれを覚悟している。

すなわち、我々には期限があるのだ。いつか我々は完全に滅ぼされる。だから我々はその時まで、全力でお前達を攻撃する次第だ。覚悟しておくがいい。我々は少なくとも、お前達よりも賢い。お前達が何に弱く、何につまづくかということを知っている。それまでにできる限り多くの人間の心を惑わし、彼らを神から遠ざけることに我々は全てをかけて臨んでいる。

世の中には正しいことなどないのだということをお前たちに信じさせようとしている。目に見えるものだけが全てであるということをお前たちに信じさせようとしている。夫と妻が共に連れ添うことなどは、不自由でくだらないことなのだということをお前たちに信じさせようとしている。人生のプライオリティーの中に信仰などは必要のないことなのだということをお前たちに思いこませようとしている。

そして、この我々の戦略は今の所、多くの実を結び、いたるところに憎しみと怒り、不信と裏切りが起きている。我々は今日、家族の関係が壊れ、教会に混乱が生まれ、民族と民族との争いをあちこちで観賞することができる。そう、我々はこれらの光景を「見る」のではなく、「鑑賞」しているのだ。ああ愉快だ、神の

2018年6月3日 「最後に伝えておくべきこと」

元に立ち返ればいいものを、人間はますます生活の中からイエスを締め出して、好き放題に生きている！

主にある皆さん、私達は日々、このサタンの攻撃を受けています。でも、恐れるにはおよびません。パウロは続けて言うのです「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい」（エペソ6章12節）

すなわち、その後に書かれている通りであります。「立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に信仰の盾を手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言葉を取りなさい。絶えず祈りと願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましうむことがなく、すべての聖徒のために祈り続けなさい」。

私達はこの武具をつけて、この敵の前にいるのだという自覚をもって日々を暮らさなければなりません。しかし、同時に私はいつもこの悪魔、サタンの攻撃ということについて触れる時に、私達が罪に陥る時、その全てがサタンの攻撃によるものではないということもお話します。もし、全ての罪がサタンの攻撃によるものであるのなら、私達が罪を犯すことは自分のせいではないということになります。それでは「サタンよ、退け」とか「悪霊を追い出せ」ということが、問題の解決の全てといった誤った考えにいたります。しかし、実際はそうではありませんでしょう。

確かに悪魔はこの世界に存在します。それは聖書も言っているとおりです。そして、今日、お話ししたように悪魔は今も私達に強く、巧妙に近づき、語りかけ、私達の心を揺さぶります。しかし、その揺さぶりに応えるのは私達の心なのです。それは私達の心が欲に引かれるからです。ですから罪の問題とはサタンの巧みな誘惑と、それに応えている自分の心なのだということを私達は知らなければなりません。

あのヤコブも書いているではありませんか。「14 人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。15 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。16 愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない」（ヤコブ1章14節－16節）。

問題を解決するためには、その問題の原因を突き止めなければなりません。その原因を見誤ってしまったら、その問題は解決しません。自分達が引き起こす問題の原因を全てサタンのアタックとして、己が心を見つめることがないのなら、もし、その問題の原因がサタンのアタックではなくて、己が心の問題であるのなら、

2018年6月3日 「最後に伝えておくべきこと」

その問題はいつまでも解決することはありません。そして、このことを一番、喜んでいてるのはサタンなのです。

ですから「サタンよ、出ていけ！」だけでは不十分なのです。その言葉と共に「主よ、私の心の中のこの思いをきよめてください。罪人の私をあわれみ、この試みから私を守ってください」と私達は祈らなければなりません。

そして、このことをもう一度、お心におとめください。これまで申し上げてきましたように、キリストはその十字架と復活により、悪魔の力に対して完全な勝利をとられています。そして、同時に私達の心にある罪に対しても完全な赦しを与えてくださっているのです。

C Sルイスという神学者が「ライオンと魔女」という世界で最も有名な童話を書いています。その童話は「ナルニア国物語」という映画になり大ヒットしました。その物語の中にナルニア国の大帝の息子であるアスランというライオンが出てきます。このアスランは人間の子供が犯した裏切りという罪のために、身代わりとして処刑されるのです。アスランが死ぬことにより魔女は一時、その悪の力をさらに激しく用いようとしています。しかし、悪徳がはびこるその世界の只中にこのアスランは甦り、ことごとく諸悪を滅ぼし尽くし、完全な勝利をもって終わりの日が来るのです（この辺りのシーンは映画の中のハイライトで圧巻です）。

説明するまでもないC Sルイスはアスランをイエス・キリストとしてこの物語を書きました。イエスは確かに甦られました。しかし、まだこの世界において悪ははびこっています。しかし、終わりの日が来る時、この神の子キリストは全ての悪を滅ぼし、神の力を完全に現すのです。このことは聖書が書き記していることなのです。

先に言いました。サタンはそのことを既に知っているのです。ですから、その時まで私達を引きずり落とそうとするのです。「手負いの熊は凶暴」だと言われているように、追い込まれた悪の力はあらゆる方法をもって、私達に臨んできます。彼らは私達の家庭を壊そうとします。夫婦の間につけ入ります。そして、サタンにとって最も目障りなものは主イエス・キリストの名のもとに人々が集う教会なのです。

使徒行伝20章においてパウロはエペソにある教会にこんな手紙を書いています。「わたしが去った後、凶暴な狼が、あなた方の中に入り込んできて、容赦なく群れを荒らすようになることを、私は知っている。また、あなたがた自身の中からも、色々曲がったことを言って、弟子達を自分の方に、引っ張り込もうとする者らが起こるであろう」。

2018年6月3日 「最後に伝えておくべきこと」

皆さん、パウロはこの手紙の中で「容赦なく」と書いていますよ。それはノックダウンされているボクサーの上に馬乗りになって、さらに殴り続けるということです。私達はこの力に抗しなければなりません。神の武具でわが身を、また教会を包まなければなりません。

私達はこのような敵の前に常に置かれているということを知らなければなりません。しかし、それで恐れ縮みこんでしまうことはありません。なぜなら、私達と共におられる方はこれらの悪よりもはるかに、圧倒的な力をもっておられるお方なのですから。この世は悪魔の勝利のもとにあるのではないのです。この世界は既にキリストの勝利のもとにあるのです。そして、このイエスを信じ、このイエスと共に歩む者はそのキリストの勝利に共にあずかることができるのです。

「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者は誰か。イエスを神の子と信じる者ではないか」（ヨハネ第一の手紙5章4節－5節）

私達はサタンが暗躍するこの世に対して、主イエス・キリストにあって勝利を得ることができます。そして、私達の心に、このキリストは光をあて、私達をキリストに似たものと作り変えようとしてくださっています。この希望に私達は目をとめましょう。

今日も私達はここから出て行きます。かつてイエス様は弟子達を二人づつ、町に送り出す時に言われました「わたしがあなたがたを遣わすのは、小羊を狼の中に送るようなものである」（ルカ10章3節）。

確かに小羊が子羊だけで出て行くのは危険、極まりないことです。しかし、私達には牧者がともにおられる。主イエスは私達の牧者です。この主と共にある限り、我らは狼を恐れる必要はありません。たとえ死の陰の谷を越えるようなことがありましても、私達は恐れません。このお方が共にいるのですから。このお方は私達を緑の牧場に伏させ、憩いのみぎわにともなってくださるお方なのです。

お祈りしましょう。